

美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

1

2021 January/February  
TAKE FREE  
NO.63

特集  
地芝居、  
黒森歌舞伎の1年  
庄内憧憬  
稻田美織  
写真家



## Cradle 1

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

2021 January/February

令和3年1月1日発行(隔月奇数月発行)第11巻3号(通巻63号)

発行/Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0235(64)0888

制作/Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コマツ・コーポレーション] 電話0234(41)0012



## 謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします  
本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

S 荘内銀行

FIDEA GROUP

冬が生命に力強さとエネルギーを授けていた。  
だからこそ庄内の春は、  
一層その美しいきらめきを放つのであるう。



雪解けの頃、月山で咲くイワカガミ  
写真=稻田美織

## 一枚の写真に導かれて

稻田 美織

庄内を訪れたのは、今から11年前の9月。映画『蟬しぐれ』に出演され庄内にご縁ができた俳優の原田美枝子さんに導かれ、私は生まれて初めて鶴岡駅に降り立った。そして山伏の先達により、月山8合目から湯殿山に悪天候の中を縦走したのだった。一度も景色を望むことはできず、雨と白い霧の中をただひたすら黙々と登つていった。結局、道中で写真を撮影する機会はなく、湯殿山に到着した時によく雨がやんだ。その時、目の前に広がる光景に息を飲んだ。たなびく雲の上に山々が島のように姿を現し、まるで水墨画のようだつたのだ。私はそれを無我夢中で撮影した。その時の一枚の写真によつて、私は出羽三山神社に導かれ撮影をする機会をいただいた。

その写真は2019年、『日月巡礼出羽三山』という写真集の表紙となつた。

庄内の冬の美しさは格別だ。ある日、雪原で月山を撮影していると、真珠貝色の雲の隙間から一筋の光が山肌を照らし、雪に覆われた月山は特別な存在感を放つていて、その神々しさは圧倒的である。まるで地平線から姿を現した大きな満月のようだ。

また春の訪れは、山裾から広がつてゆくのかと思つていたが、雪解けの頃、月山に登つて見た春

の始まりは、私の想像をはるかに超えていた。なんと高度は関係なく、雪が解けたところから春が訪れていたのだ。高山植物は雪の消えた部分で可憐な花を開花させ、水芭蕉はまるで輪になり踊るバレリーナのようだつた。

私はずっと春が季節の始まりと思つていただが、冬からさまざま準備が始まつていてことに気が付いた。冬に降つた山の雪が水を蓄えるダムになり、春から夏に、山のミネラルをたくさん含んだ水によつてあらゆる生命は生かされる。雪の下や硬い木の幹の中では、すでに桜や多くの花の蕾の準備が始まつていて。冬が生命に力強さとエネルギーを授けていたのだ。だからこそ庄内の春は、一層その美しいきらめきを放つのであるう。

いなた・みおり／多摩美術大学油絵科を卒業し、教職を経て、1991年からNYに移住。95年ハーバード大学で個展デビュー。アメリカ同時多発テロを自宅で目撃して以来、世界中の聖地の撮影をライフワークとする。05年に伊勢神宮、09年に出羽三山神社の撮影を開始。国連、コロンビア大学、イスラエル美術館、致道博物館、スイデンテラス、外国人記者クラブなど世界中で展覧会と記者会見を開き、ワシントンポストなどさまざまな媒体に掲載される。出版多数。12年中國交正常化40周年で展覧会が外務省正式行事に。16年伊勢志摩サミットで写真書籍がG7首脳陣に公式配布。15年神道文化功劳賞。



特集

# 地芝居 黒森歌舞伎の1年

赤い鳥居に雪がかかり、杉木から時折木漏れ日がさす2月半ば。

「寒中芝居」「雪中芝居」と呼ばれる地芝居の正月公演が行われます。

酒田市の黒森地区に江戸時代から伝わる「黒森歌舞伎」は、

旧暦の小正月に、鎮守日枝神社の祭礼として奉納上演されてきました。

降る雪も冷たい風も演出となつて、役者勢の渡り台詞にますます場は熱を帯び、

日が暮れるまで、最後の場面を名残惜しむように誰もみな芝居に興じます。

希望の祈の音とともに、また新しい1年が幕を開けます。280年を超えて続いてきた歴史は、この時世によつて上演の中止を余儀なくされながらも

30余年にわたって黒森歌舞伎をカメラで追い続ける。

写真提供=松本鶴子(黒森歌舞伎妻堂連中 座員)

二科展写真部山形支部員。第12回酒田市土門拳文化賞奨励賞(2005年度)、第60回齋藤茂吉文化賞(平成26年度)など受賞歴多数。

著書に写真集『黒森歌舞伎の記録』ほか。酒田市日吉町「麻禮夢 華苔」オーナー。

プロフィール写真他撮影=Cradle

# 黒森歌舞伎の歴史

江戸で花開いた庶民文化「歌舞伎」が、旅役者らによつて

地方の城下町から農山漁村にまで伝えられた享保年間。

酒田の黒森村にも旅籠があり、村人は役者との交流の中でその芝居や物語の楽しみを知つていきました。享保年間を創始とする「黒森歌舞伎」は280余年もの歴史の中で日本の「地芝居」の文化をつないできました。



写真提供=黒森歌舞伎妻堂連中

昭和38年に常設舞台として演舞場が完成、写真はその翌年に上演した「時今也桔梗旗揚」。  
役者の中には、黒森歌舞伎の演出に多大な影響を与えた振者（演出家）、佐藤藤太郎氏の姿もある。

享保20年、靈夢に導かれた黒森村の興吉家、幼名興作が、斎戒沐浴して彫った「面」、それは歌舞伎の開演に先立つて演じられる式三番の「翁」と「三番叟」の面でした。それが黒森歌舞伎の始まりに由来すると伝えられています。創始の由来は諸説ありますが、280年もの歴史が続いてきたことは、黒森の人たちが歌舞伎に情熱を傾けてきたからに違ひありません。「ここまで続いてきた最大の理由は、鎮守・日枝神社の祭礼と座の行事が結びついてきたからでしょうね。黒森歌舞伎にはその昔ながらの地芝居の伝統が受け継がれています」。そう話すのは妻堂連中座長の五十嵐良弥さん。役者、裏方、運営からなる妻堂連中（座員）は黒森地区の人たちで構成し、それぞれ仕事と両立しながら行事や公演に向けての稽古や準備をこなし、地芝居の歴史をつないでいます。

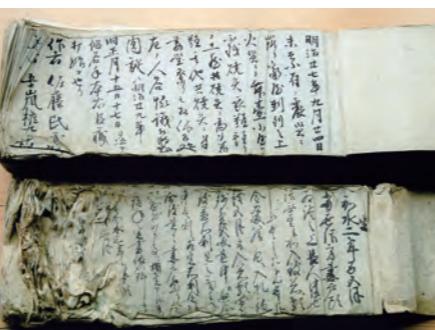
全国に数ある地芝居の中でも、黒

黒森歌舞伎妻堂連中 座長  
五十嵐 良弥さん

昭和33年生まれ。7歳で初舞台を踏み、役者として活躍。42歳でお囃子の後継となり裏方に回る。令和元年、座長に就任。前座長で盟友の故富樫久一さんの想いを抱いて、ポーランド公演を実現、大成功を収めた。



令和元年11月3日～8日のポーランド公演は、日本との国交樹立100周年記念イベントの一環で開催。会期中に歌舞伎の上演だけでなくワークショップも行い、海外初公演は大盛況となった。



妻堂連中の「妻堂」とは道祖神すなわちサイノカミ（塞の神）、サイド（塞道）を意味し、奉納芝居としての歴史が読み解ける。「妻堂帳」は嘉永3（1850）年から演目や会計報告などを代々の座長が記録し、受け継いでいる。



黒森歌舞伎で上演される演目は50数番。「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」ほか「高田馬場十八番切」などの黒森独自の演目も多く残っている。

森歌舞伎は古典的な歌舞伎の特徴を残しているといわれます。それは「女性を男性が演じている」「太夫と語りがそろっている」「舞台が幕一枚の背景ではなく毎回組まれる」ということ。「役者は主役を張つていた人がやがて裏方に回り、次の主役を育てます。この世代交代を10～20年サイクルで行い、技術面を維持してきました。逆に言えば主役が育つまでにそれくらいかかるということ。このサイクルが今後は難しくなるでしょうね」。少子化が進み後継者が減っていく中で、25年前「少年歌舞伎」を立ち上げ、黒森小学校の子どもたちを対象に次代の担い手を育て始めました。「最近は黒森以外から座に入りたいという子も出てきました。地の者だけで演じる地芝居です

が、続けていくための知恵を出し合つて、未来につなげる活動をしていきたいと思います」。

一方、長い歴史の上でうれしい転機もありました。東京大学大学院の研究生で長く黒森歌舞伎を研究していたポーランドのイガ・ルトコフスカさんとの10年来の約束を叶え、令和元年に初の海外公演を実現。ポーランドでの全4公演はすべて満員御礼、大盛況のうちに幕を閉じました。

「スタンディングオベーションが起つて、我々の芝居が海外の人たちに伝わったという実感を得ました。通訳をしてくれた現地の学生とは今も交流が続いている、海外の人たちと文化でつながることができたことは何よりの成果でしたね」。



享保20年に作られた翁、三番叟の御面。神靈を宿すとされ、黒森地区から外に持ち出されることはない。



衣装部部長・会計  
佐藤 秀さん

昭和30年生まれ。代々翁面と三番叟の御面を受け継ぐ家系に育つ。30余年前に座員となり衣装部長に抜擢、その後会計を担当。

員が舞台をつくることへの意識を強めだと五十嵐座長。ある意味「新生」ともいえる黒森歌舞伎、令和3年の正月公演は全員が開催の意向でしたが、時世には逆らえず無念の中止が決りました。「庶民が見て楽しめるのが歌舞伎。心から楽しめる日が来たら、座員が一心となつていい舞台をお見せしたいと思います」。



黒森小学校の男子生徒による少年歌舞伎。歌舞伎の名場面を見事に演じます。

# 奉納芝居の四季

かつて「農民歌舞伎」といわれていたように

黒森歌舞伎の1年は、四季の農作業と結びついていました。

娯楽のない時代、農民らが芝居小屋を建て、舞台をつくり、

ひしめく観衆に芝居を届け、また日常へと戻っていく。

以来、古典の地芝居はその土地の人々と共に進化を続けながら、

おおらかな農村の原風景を残し、その時代の景色を映し出しています。

黒森歌舞伎は令和2年、「第3回  
未来かがやくやまがた景観賞」県知  
事賞を受賞しました。地域をあげて

保存と伝承に努め、ポーランド公演  
による国際交流への貢献を期待され  
ての栄誉。そのプレゼンターを務め  
た酒田市教育委員会の川島崇史さん  
にお話を伺いました。

「地芝居は全国に170あるといわ  
れています。黒森歌舞伎はその中で  
も地域の祭礼と結びついて定着して  
いることに文化的な価値があります」  
江戸時代、歌舞伎はその語源の「傾  
奇者」なる異端の象徴から、厳しい  
上演の制約を受けました。しかしそ  
の制約に反し、旅役者によって舞台  
の面白さにひかれた地方の庶民らは、

自らの土地で芝居を楽しむようにな  
ります。やがて「神社への奉納」と  
いう形をとつて制約をぐぐり抜け、  
地芝居は広がりを見せていきました。

「近年は地芝居も地域おこしのよう  
な観光的な面も持つようになります。  
たが、奉納行事の形として残る黒森  
歌舞伎は実に古典的です。しかも昔  
から運営にかかる費用は行政の補助  
金などに頼らず、自分たちで集めた  
寄付で賄っています。だからこそい  
い舞台をつくり守つていこうとい  
う気持ちが強いのだと思いますね」

20年前の調査研究を機に、長くそ  
の歴史を見つめてきた川島さんは、  
景観賞でのプレゼンの最後をこう締  
めくっています。「幼少期から地  
域の伝統文化にふれ、自ら参画する  
ことで、地域への愛着や誇り、人と  
地域とのつながりを築く力が養われ  
る。感動を与えることで、伝統文化  
を継承していく心と生きがいをも生  
み出す。黒森歌舞伎は、地域の未来  
を担う、人を育てる活動でもある。  
先人たちが大切に守ってきた地域文  
化の灯を絶やすことはできない」。

—お話を聞いた方—  
酒田市教育委員会  
川島 崇史さん

社会教育文化課文化財主査兼係長。  
平成11~14年度に実施した黒森歌舞  
伎の調査研究に参加して以来、公私に  
わたってその伝承保存に携わる。ポー  
ランド公演では事務局として一行を支  
えた。ご長男がその姿に影響を受け黒森  
歌舞伎への参加を熱望、地区外から初  
の「研究生」として迎えられている。

昭和54年に黒森地区的故星川竹雄氏が  
描いた年中行事絵巻「黒森芝居の絵暦」。

## 年間行事

3月10日前後の日曜日

### 太夫振舞

翌年の演目を決める祭礼。地区の若者が筆者となり精進潔斎して、神事の後、社殿裏の井戸戸水を桶で7杯半の水垢離(みずごり)をとり身を清める。続く「ご神箋(しんせん)の儀」では、予め総会で選んだ3つの狂言を書いたこより、白米を入れた1升枡の上に置き、神意によって釣り上げた1本が翌年の演目となる。



4月29日

### 春例大祭

4月29日は日枝神社の例大祭。神事の後の渡御行列では、子どもたちが翌年の演目の衣装を着て、正月公演の予告披露としての山車が練り歩く。その後、当年の神宿の主人らが歌舞伎の仮装行列で翌年の神宿に向かい、神宿渡しを行う。



8月

### 虫干し

黒森歌舞伎では衣装約500点、かつら約50点を行李に入れて蔵で保管している。8月の好天の日、衣装部を中心に蔵から衣装を出して神社の境内一面に張ったロープに広げて干し、点検を兼ねる。干し終えた衣装をたたみ、翌年の公演で使う衣装と使わざ保管する衣装とを仕分ける。



8月16日

### お面開き

享保20年、集落の「與作」という若者が斎戒沐浴をして翁面と三番叟の面を彫り、奉納したことから歌舞伎が始まったとされる。御面には神靈が宿るとされ、子孫の家の神棚に祀り、この日と正月公演の時のみ箱から出される。妻堂連中の代表が子孫の家から神社へと御面を運んで神前に安置し、神楽と式三番叟が行われる。



10~11月

### 役割

振者の原案のもと配役を決定する。

### 本読み

役者が演舞場に集まり台本の読み合わせ。年明けの立ち稽古まで何度も行われる。

1月

### 地図め

全座員が集まって今後の日程確認や衣装出し、大道具の点検などを行い、正月公演に向けて本格的な稽古や準備に入る。

2月

### 二日奴

昔行っていた寄付願いの「勧進」。現在も妻堂連中が黒森地区の家々や庄内地域の企業などに協賛金のお願いに回っている。

2月3日

### 節分

演舞場の玄関や舞台など四方を酒で清めて豆をまく。その後生豆を12粒焼いて、その焼き具合で今年の天気を占う。

2月第一日曜日

### おさらい

通し稽古を行い、地区の人々に披露する。



2月11日

### 花道づくり

昭和38年に演舞場ができるまでは「掛け小屋」といって地域の人々が仮設の芝居小屋を建てていた。その名残で現在も地区の自治会が持ち回りで、妻堂連中と一緒に花道を組み立てている。



2月14日

### 寄せ太鼓

公演前日、境内に黒森地区の子どもたちが集まって、明日の歌舞伎の予告と入りを祈願して太鼓を打ち鳴らす。



### あご別れ

公演前日の最終確認と成功祈願。

2月15日、17日

### 正月公演

10時から神社拝殿で神事が行われる。舞台では、黒森小学校の生徒による黒森少年太鼓、続いて神楽、式三番叟、黒森少年歌舞伎、本狂言が上演され、夕刻に終演する。

2月18日

### 勘定、おしろい落とし

公演の経費を精算し、黒森地区の家々に公演の報告をしながら神状札とお神酒を届ける。その後、直会で座員らは勞をねぎらい酒を酌み交わす。



# 妻堂連中の 芸と技

**妻堂連中が一座をなす黒森歌舞伎。**

現在は45名ほどが在籍し、振者、役者、淨瑠璃、お囃子、衣装、床山、大道具、小道具、運営方、相談役の10の部会に分かれながら、それぞれの思いと情熱で黒森歌舞伎を演じ、支えています。

そんな座員の皆さんに会いに行きました。

吹雪が舞う1月下旬の夜、演舞場

に仕事を終えた役者たちが集まり、正月公演の練習を行います。「自分たちは元役者のじいさんたちと歌舞伎の話をしてきた世代で、夜中まで酒飲みながらいろいろ教わったなや。『褒められんなも笑われんなも役者。下手な演技はでぎねど、自信持つてやれ』ってハッパかけらっだけの」そう話すのは看板役者の佐藤敬さん。祖父が座長を務めていたことから高校卒業後に熱心な誘いを受け、平成3年頃に断りきれずに参加。次第に演じることの面白さに目覚め、十数

年前からは主役を多く演じています。

主役と張り合う敵役を主に演じている菅井克之さんは、役者をまとめる大頭も担当しています。座に入ったのは平成5年頃。高校を卒業して地元を離れた際に「地元に戻って地域貢献できる何かをしたい」と考え、帰郷後すぐに自ら黒森歌舞伎の役者を志願しました。「正月公演に向けた稽古を初めて見に行つた時、当時の役者たちのセリフを聞いてゾクつとして、演技に釘づけになつての。この人たちの一員になれるんだつたら、自分は生涯歌舞伎を続けていき

たいって思たなやの」。

座の飲み会に参加したのを機に練習に誘われ、気がつけば舞台に立つていたというのは、女形を主に演じる五十嵐司さんです。「初舞台後の打ち上げがとにかく面白くて今に至るわけですが、セリフがついて、他の役者との掛け合いが増えてくると演じることが楽しいと思うようになりました」。

座に入り、続ける理由はさまざまでも「普通に生きていれば拍手をもらうことなんかめつたにない。するとだんだん欲が出て、もつともつとうまくなろうと役者は思うわけでの」と話す敬さんは以前は練習が嫌いで、一人自宅でプロの所作を模倣して本番に向かっていたそう。次第に大きな役がつき練習に行かざるを得ない

状況になると、周りと自分の調子が合わないことに気がつきます。それ以来、練習に足を運ぶようになると徐々に周りとの呼吸が合うようになります、物語の意味を深く捉えられるようになつたと言います。「大切なのはセリフや呼吸の『間』。それが合えば演じることががぜん面白くなるし、客席にも伝わる。結局は我々が一番面白がつていないとダメでの。28

0年続いてきた中で自分たちはほんの少しの関わりだけど、この時代が一番面白かったって言われたくて統けでんなやの」。役者は全員がライバルで、舞台は個々の技の競い合いだったという時代から、呼吸を合わせ、役者全員でつくる舞台へ。黒森歌舞伎の役者表現は、新たなステージに入っているのかもしれません。

## 役者

七五調の小気味いいセリフにのせて、力強く見得を切る。  
いつの時代も客席を魅了してきた黒森の役者たち。

俳優部には現在20名ほどの役者がいます。



佐藤  
敬さん  
役者名／笛本 敬

昭和46年生まれ。立役として荒事や二枚目などをこなす。過去には女形の経験も。ポーランド公演を経て「座が一枚岩になった」と話す。



菅井  
克之さん  
役者名／岩井 克之

昭和43年生まれ。敵役の代表役者。思い出深い演目は「忠臣蔵」(平成16年)。演じてみたい役はまだまだたくさんあるそう。



五十嵐  
司さん  
役者名／市川司

昭和58年生まれ。現在は女形が多いが、ポーランド公演の演目「義経千本桜」の狐忠信を演じるのが目標。





## 浄瑠璃

浄瑠璃とは物語のナレーター的存在で、三味線を伴奏に太夫が語る芸能のこと。ここにお囃子が加わって表現豊かな舞台芸術をつくり出します。

歴代、1人で三味線と太夫をするのが伝統だった黒森歌舞伎の浄瑠璃。

24歳で座に入つて以来、役者一筋

だった星川貴史さんは先代の太夫の逝去に伴い「続けていくためには誰かがやらないといけない」と太夫の道へ。

役者経験を生かした語りを担当し、平成24年からは三味線の佐藤潤一さんと2人体制の浄瑠璃になりました。

黒森の浄瑠璃には正式な譜面がないので、過去の映像を見て一つ一つ音を拾つてつないでいます。

相方の佐藤潤一さんも20年来、三味線一筋。「ゼロから積み上げて完成させる達成感があります。行事

が生活のサイクルに組み込まれてい

て、打ち上げの時になると一つのものを完成させたやりがいが残る。だから続けてこられたと思います」。

浄瑠璃は、舞台の流れを時に導き、時に抑える重要な役割を担つています。

「役者に熱が入つてくると我々も引き込まれて、時々演技に見入つてしまふこともあります」と潤一さん。

貴史さんも「演技に感動して語りながら泣くこともありますよ。そ

の時はきっと、いい舞台ができる

りなんだろうなと思いますね」。舞台の上で役者を盛り上げていきたい、

と話すお二人。表舞台も裏方も一人一人の「芸」を結集した歌舞伎は、日本の総合芸術の粹を見せてくれます。



星川 貴史さん  
役者名／松本 貴史

昭和43年生まれ。俳優部で立役などを経て7年ほど前から太夫を担当。地元の若手や高校3年生への新規勧誘、少年歌舞伎の指導にも携わる。



佐藤 潤一さん

昭和47年生まれ。お囃子部の部長で三味線を担当。黒森歌舞伎の幕開けを飾る黒森小学校の生徒たちの「少年太鼓」の指導も受け持つ。

## 舞台

村人総出で一から組み立てていた芝居小屋は昭和39年に今の大舞台へ。これほどの舞台装置がそろう地芝居は他にないといわれています。

「役者が気持ちよく演じられるよう」という思いで舞台を組んでいますが、と話すのは、結婚を機に平成18年に埼玉から黒森に移り住んだ星川辰也さん。それまで歌舞伎にふれたことのなかった辰也さんは、毎年の演目が決まるたび過去の映像から学んで舞台をつくり、現在は五十嵐座長いわく「なくてはならない存在」として大道具部の部長を任せています。

黒森の舞台は幕一枚で展開する他の地芝居と違い、演舞場の天井に何本もの「バトン」が設置され、場面に合わせた幕や舞台道具が吊るされます。「浅葱幕」と呼ばれる薄幕も独自のもの。倉庫には襖だけで何十枚あります。

種類も保管し、演目に合わせて選び、足りないものは大道具部や小道具部が一から作ります。「ここまで本格的になつたのは、昭和20～30年代に黒森に一時住んでいた舞台づくりのプロ、渡部幸次郎さんのおかげです。その教えが今につながって全体の質を高めているのだと思います」。そう話す副座長の佐藤芳弥さんは、持ち前の器用さを生かし、役者時代から小道具作りを手伝つていました。「床山部は役者に合わせてカツラの髪を結い直し、衣装部は仕立て直しや新しく作つたりもします。各部が責任感を持つて専門的な仕事をしているから、全体が成り立つんです。うちの座は恵まれていると思いますね」。



佐藤 芳弥さん

昭和30年生まれ。役者を経て小道具部へ。現在は副座長を務める。振者の佐藤利一さんと共に少年歌舞伎の指導も行い、後継者育成と座の継承に力を入れている。



星川 辰也さん

昭和51年生まれ。埼玉県出身。32歳で座に入り、舞台づくりの勉強も兼ねて役者を経験、現在、大道具部長。ポーランド公演では多くの制約の中、現地で見事な舞台を立ち上げた。

山菜・山の恵みの「菜」  
清める・精進潔斎の「斎」、循環・再生の「再」  
3つのサイを意味する「SAI」が  
令和2年度「つるおか名物コンテスト」  
加工食品部門で、金賞受賞!

## 羽黒山参籠所 斎館の SAI出羽三山

ワラビにフキノトウにウド、シソの実…。今秋、出羽三山で採れる山菜をふんだんに使った「SAI出羽三山」が誕生した。きっかけはコロナ禍によって来山者が激減したことだった。というのも出羽三山では昔から参拝者や修行者は山のものを食べ、身を清めて山に入った。そのため出羽三山には山の恵みを「採取する人」「提供する人」「食べる人」がいて、山の自然環境はその三者の循環によって何百年も守られてきたという歴史がある。だが今年は来山者の激減で「食べる人」が減り、採取した山菜が行き場を失った。山の循環が危ぶまれる事態となつたのだ。

SAI開発プロジェクトはこれを背景に始めた。食開発は出羽三山神社羽黒山参籠所斎館の伊藤新吉料理長が担当。「お山の味をできた状態で、来山できない人や遠方の人にお届けしたい」と「干しわらびの松前」、「山蕗とふきのとうの味噌」、「山うどと紫蘇穂の味噌」を考案した。商品化は「Our Dewasanzan」(高城豪代表／令和2年発足)が担当。試食を重ね、容器やネーミング、ロゴなどを決め、3種セットの特製パッケージには庄内一円の農家が松例祭に向けて神社に毎年奉納する稻わらを使った。こうして完成したSAIは、素朴で野趣に富みつつも洗練されていて、出羽三山のお土産や贈り物にピッタリ。滋味あふれる天然の山菜を、のせるだけ・和えるだけで手軽に味わえるのもうれしい。そして何といってもSAIを体に摂り入れると、自分が出羽三山の循環の一部になつたような、そんな気分になる。



購入はオンラインショップ「出羽三山のある暮らし」にて。賞味期限を考慮し、予約分を毎週木曜日に製造、翌金曜日に発送(賞味期限は1~2週間)。直接購入の場合は、斎館に電話予約の上、斎館か山伏茶屋(山頂)、いでは文化記念館、社務所(随神門隣)のいずれかで受け取り(金曜日限定)。

羽黒山斎館 ☎0235-62-2357  
オンラインショップ「出羽三山のある暮らし」

(取材・文 長谷川結)

上から  
山蕗とふきのとうの味噌  
干しわらびの松前  
山うどと紫蘇穂の味噌



